

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
99-009	日韓対照文法研究(韓国語母語話者の会話の聞きとり調査)		
	韓国	高麗大学校	2000.2 ~
	平 香織	東北大学大学院	院生修士

研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

韓国語と日本語は文法構造上、類似点が多い言語であると言われているが、細部を分析してみると明らかな相違点が見られる。特に、著しい相違点として挙げられるのが、文末に現れる話者の主観的な態度を表す韓国語の接辞と日本語の終助詞である。韓国語には話者の主観的な態度を表す機能を持つものとして-ci, -ney, -kwun, -lkay, -llay といった接辞と呼ばれるものが存在し、随意的に聞き手に対する尊敬を表す-yo という語尾を付加することができる。一方、日本語にも同様の機能を果たすものとして「ね、よ、わ、ぞ、ぜ」といったその名の通り文末に生起する終助詞と呼ばれる品詞が存在するが、日本語の終助詞には韓国語の-yo のように文法機能を異にする文法形態素がその後に加することはない。

韓国語の接辞、及び日本語の終助詞に関するこれまでの研究では、個々の文法形態の一般的な機能が明らかにされながらも、両言語の比較対照研究は積極的に行われてこなかった。特に日本語の終助詞に関しては、英語との比較対照研究が盛んに行われてきたため、日本語の特異性だけが強調されてきた。それらの研究の方法は、研究者の作例、内省に頼ったものが多く、作例、内省以外の方法としては、小説などの書き言葉を用いた分析が盛んに行われてきている。研究者の作例、内省を用いた研究や小説などの書き言葉を用いた研究も文法現象を捉える上では必要ではあるが、主に会話で現れる韓国語の接辞、日本語の終助詞に関しては、書き言葉や作例だけに頼って説明するには限界がある。申請者の研究対象が、会話で用いられる話者の主観的な態度を表す文法形態であるため、勸告人母語話者の実際の会話を録音、分析することによってその本質的な機能を明らかにしなければならない。また、韓国語と日本語に対して抱かれている「似ている」という漠然とした印象論を超えた、新しい捉え方を導く必要があると考える。

成果報告書

助成番号 99-009

氏名 平 香織	留学先国名 大韓民国	機関名 高麗大学校
---------	------------	-----------

留学を終えた今、2年間の生活を振り返ってみると研究や授業、生活のあらゆる面で大変充実しており、かけがえのない時間であったと改めて実感しております。

私は大学・大学院時代と留学以前から韓国語の文法を中心に研究を行ってきましたが、一言に文法研究と言ってもその分野は広く研究方法も多様です。対象とする言語に関わらず、これまでの日本の文法研究では「この文が文法的に適切であるか」ということを研究者の内省や作例によって判断するものが主でした。勿論そのような研究も必要ではあると思いますが、言語が常に変わりゆくものであり、その変化が書き言葉よりも話し言葉が先に起こることを考慮した場合、「文」単位よりも「会話・談話」単位で言語を捉えなければならないと考え、私は「話者の主観的な態度がどのような形態で表されるのか」また「会話の中でその形態はどのような機能を果たしているのか」ということに関心を持っておりました。そのため私の研究には現地の生きた韓国語に接することが必要不可欠でした。

留学中、2000年10月に東北大学の指導教官と共著で Japanese/Korean Linguistics Conference という学会誌に “Where Korean and Japanese Differ: Modality vs. Discourse Modality.” という題で発表をし、2001年2月には母校である神田外語大学の『語学年報』に「現代朝鮮語の終止形語尾 -ney に関する一考察」という題で投稿致しました。会話で使用された数多くの用例を基に、各形態が持つ機能をより明らかにすることができたと思います。またそれらの用例を随時多くの韓国人に検証することができ現地で学ぶことの意義を改めて感じました。

また、2001年7月頃、修士論文を書くことを決意致しました。

それまでは修士号を取得することを目的とした留学ではないため、論文を書くことに迷いがありました。しかし指導教官から書いてみることを勧められ、「韓国語の終結語尾‘-ci’と日本語の終助詞「ね」、「よ」に関する対照研究—情報のなわ張り理論の観点から—」という題で修士論文を作成致しました。「情報のなわ張り理論」とは日本語の終助詞「ね」の機能を解明するために神尾昭雄先生が提唱した理論です。主にアメリカで提唱される理論を使用する韓国では「情報のなわ張り理論」を知っている人はほとんどおりませんでした。私の論文によって、この理論自体に興味を持った人も多くおり、また国語国文科ではあまりなされない日本語と韓国語の対照研究という点で評価を頂きました。修士論文を作成しながら表現力や語彙の足りなさを感じつつも周囲の韓国人の助けを借りながら、無事書き終えることができました。韓国の大学院では授業の単位数や成績は勿論のこと、論文を提出する資格を得るための「総合試験」というものがあります。修士3学期目にその試験を受けなければならないのですが、国語国文科は「国語史」と「現代国語学」の2つを受験し、それに合格して初めて論文を書く資格を得ることができます。私は3学期目に「現代国語学」をパスすることができなかつたため4学期目に再度受験致しました。初めは総合試験に受かることだけを目標として勉強をしておりましたが、勉強を始めてみると自分が興味を持っている分野の研究に進みがちであるため、どの分野の知識が不足しているのか(例えば統語論や形態論)ということを確認にすることができるよい機会でした。

大学院の授業は1つの授業につき3時間行われるのですが、初めは聞き慣れない専門用語にとまどい、また外国人であっても韓国人と同様に発表させられ、評価されるという点に驚きました。私は学部の授業も受講致しましたが、中でも「国語学講読」というハングル創製について書かれた『訓民正音』を読み解いていく授業は大変興味深いものでした。なぜ、どのようにしてハングル

が作られたのか、現在のハングルとどのような点で異なるのかなどをこれまでの学説と現在の研究の動向を交えた授業内容であり、日本ではなかなか学ぶことができないものでした。その授業では韓国語に及ぼした日本語の影響などにも触れられたのですがその度、先生が私に質問されるので日本語についても勉強をすることになりました。

韓国では学問として日本語に関心を持っている人が多く、国語国文科にも日本語に関心を持っている先輩がいたため日本語を教えることになりました。日本人であることと日本語を教えることは全く別の問題であるため、私も日本語について勉強することになりました。韓国人が日本語を学ぶ際に難しいと感じるものは動詞・形容詞・助動詞などの活用です。それまで私は日本語の活用について深く考えたことはありませんでしたが「五段活用」「上一段活用」「下一段活用」など、学校文法で習ったものだけでは外国人には理解し難いようでした。今、日本でも日本語教育が人気を集めておりますが、この機会を通して外国人に日本語を教える場合に何が問題となっているのかを垣間見ることができました。また文法的に類似点の多い日本語と韓国語に限って言えば、お互いの言語を学ぶ上で「理解し難い部分＝両言語の顕著な相違点」であると言うことができます。そのような意味で日本語の「活用」に関しては修士論文の一部に反映させました。

高麗大学では分野別に大学院生が独自で教材を選択し、週に1,2回勉強会を行っているのですが、私は意味論と国語史の勉強会に参加させてもらいました。知らないことを恥ずかしがらず、これからしっかり学べばよいという雰囲気と知識は確実に身につけるべきであるという考えを持った先輩方の中で私ももっと勉強しなければという思いに駆られました。また、長期の休みには地方の大学院生を交えた論文発表会や交流会があり、私も夏に意味論の発表会に参加致しました。そこで日本で行われている意味論の研究についてもいくつか質問を受け、関連する本などを紹

介したりも致しました。

2年間を通して高麗大学の近くの下宿で過ごしました。韓国人は勿論，韓国に留学している学生を含めそのほとんどが自炊生活をしておりましたが，私を下宿での生活を選んだ理由は生きた韓国語に少しでも多く触れていたいという思いからでした。韓国ではソウルで生活する地方の学生のため下宿が多く，私がいた下宿も学生が11人おりました。下宿での生活を通して普段あまり感じることはできない韓国人の文化を学ぶことができました。例えば，洗剤がなくなると他人の部屋に無断で入り，洗剤を持って行って使ったりするという場面をしばしば目にしましたが，韓国人は仲が良くなると自分と他人という境界が薄れるということを感じました。いくら仲が良くても自分と他人の境界がある程度保たれている日本で育った私にとって初めは理解し難いものでした。また「秋夕（日本のお盆に当たる）」と「旧正月」はソウルにいる学生のほとんどが家に帰り，近所のお店も閉まってしまい街中が閑散とします。国文科の先輩が秋夕の時，外国人1人で過ごすのは寂しいだろうと私を家に招待してくれ，一晩泊まって来ました。私は歯ブラシ，歯磨き粉，タオルなどすべてを持参していったのですが，それを見てその先輩が「うちに歯磨き粉やタオルがないと思ったの？」と笑っていました。初めその言葉の意味を理解できなかったのですが，仲が良い間柄ではそのようなものは持参しなくてもよく，むしろ持参すると相手に距離感を与えることになるという話を後で聞きました。このような体験は韓国の文化や韓国人の気質を理解する上で非常に貴重なものでした。韓国では「情^{じょう}」という言葉をよく使用し，韓国人に対する印象として「情が厚い」ということがよく言われます。韓国人は情が移ったと思ったその瞬間から付き合い方が変わるようです。日本では他人に迷惑をかけてはいけないと教育されますが韓国では情が移った関係で，相手に迷惑をかけてはいけないという気持ちがあったり，それを態度に示したりするとかえって「情」が薄れる

のです。それは言語にもよく反映されており，そのような感情を表す特定の語彙も存在します。このような韓国の文化は教科書や本からは学ぶことが難しく，実際に生活をし，韓国人と付き合ってみて初めて知ることができたものでした。

研究の合間を縫って慶州，釜山を旅行致しました。慶州は日本の京都のように寺院が多く，中でも仏国寺や石窟庵で有名な場所です。2001年の11月には下宿のおばさんの息子さんとその友達と雪岳山に行つて来ました。一人旅では味わうことができない賑やかさがあり良い思い出となりました。

2002年2月25日，修了式がありました。広いキャンパスのあちこちに花屋や屋台が数多く出て，まるでお祭りのような雰囲気でした。残念ながら私の家族は出席できなかつたのですが，友人や知人の学生がお祝いに来てくれました。

この2年間，研究に生活に充実した日々を過ごすことができました。その最大の理由は金銭的な心配をせず，研究に打ち込める環境にあったことでした。一般的に「言語」を研究の対象としている人は奨学金を受けにくいという話をよく耳に致します。その中で貴財団が言語を対象としている私を奨学生として選抜してくださいましたことに改めて感謝致しております。今後，東北大学の博士課程においてこれまで同様研究に邁進して参ります。将来は留学の経験を生かし，日本の大学で韓国語及び韓国の文化について少しでも多くの人に伝えることができるよう努力していく所存でございます。

改めて，留学の機会を与えてくださったことに感謝申し上げます。